



多聞南小のあゆみ

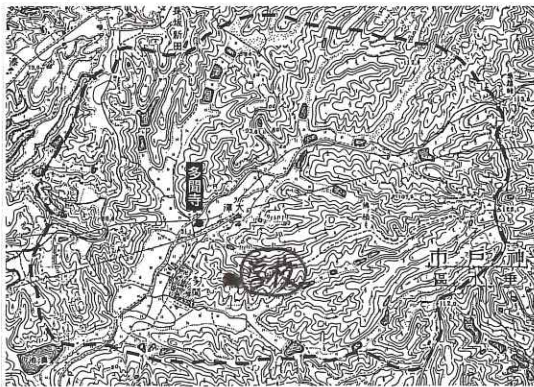
神戸市立多聞南小学校
校長室
令和2年5月1日
No. 1

今年度で47年目を迎え、半世紀に近い歴史を刻んできた多聞南小学校ですが、この令和2年度をもって閉校し、令和3年度より本多聞小学校と統合し新たな学校名で再出発いたします。これまで本校を卒業された方の数は令和元年度の卒業生を入れて2933名です。令和2年度の最後の卒業生が現在46名ですので、累計2979名が本校の卒業生となる予定です。今年度は本校最後の年となることから、過去の資料や学校沿革史をもとに多聞南小学校のこれまでのあゆみについて、年間通して振り返っていきたいと思います。1回目は、学校ができるまでの多聞のようすです。

多聞のむかし

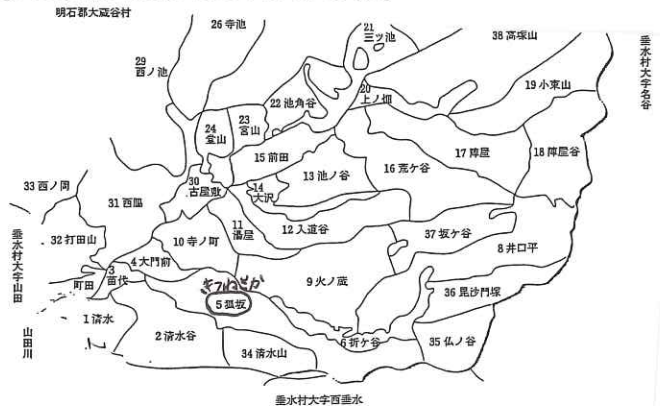
多聞村は、多聞寺の門前町として栄えた村です。門前町とは寺や神社を中心として人々が集まりできた町のことをいいます。平安時代の初め(860年、今からおよそ1160年前)にできた多聞寺は、鎌倉時代(今から700~800年前)にはかなり栄え、23の寺を構えるほどになりました。この23の寺に御用きき(寺の仕事をするために出入り)していた人々が寺近くに住むようになって村ができていきました。

このように栄えた多聞寺も安土桃山時代(およそ440年前)になって、豊臣秀吉が三木城攻めをする途中この地に立ち寄り、23の寺のほとんどを焼き払ったそうです。多聞寺を中心に栄えた多聞村もこの後にぎわいを取り戻すことがなかったそうです。



多聞寺

開発前の多聞(昭和22年[1947年]頃の国土地理院の地形図)



大字多聞村字限図(『垂水百年のあゆみ』より)

多聞寺は、仏の北方を守る武将である多聞天をまつっていることからこの名がつけられました。(多聞天のことを毘沙門天(びしゃもんてん)ともよびます。)
「多聞」という地名の由来は「仏の言葉を多く聞き、心に留めて多くを知る」という仏教の教えからきたものです。校歌にも詠われているように多聞寺は「こうべ花の名所」にも選ばれているカキツバタの名所です。カキツバタ以外にも多くの四季の花々が植えられ、「花の寺」としても有名です。

きつね坂

明治のころ、学校あたりは「きつね坂」といわれ、住む人はなく田畑として開けていたそうです。その名の通りきつねがよく出てきたそうです。（実は昨年も校内できつねを見かけたことがありました。その当時の子孫でしょうか？）このあたりは人里近くにありながら、とてもさみしいところだったようです。

おいしいすいかとおいしい大根

このきつね坂あたりは、今のような住宅地になる前は田畑が広がり、おもにすいかや大根の産地となっていました。この土地のすいかや大根が市場に出回るようになると、ほかの土地で作られたすいかや大根の値段が一度に下がったと言われるほどおいしいものでした。このおいしいすいかや大根にも「多聞」の名がつけられました。

また、「きつね坂ではすいかを作るな。」と言われていたそうです。それは、このあたりでできるすいかのおいしさを知っているきつねがたびたびすいかをねらって、畑に取りにやってきたそうです。すいかを片手に大事そうに抱きかかえ、残りの3本足で素早く駆け、林の中に消えていったその情景が目の前に浮かんでくるようです。



すいかや大根は、同じ土地で続けて作ることを避けなければなりません。ですから、毎年たくさん取り入れようとすれば、かなり広い土地が必要でした。学校あたりや山田川沿いの土地は、そういった畑がかなりの広さで開けていたようです。

多聞南小学校ができるまで

多聞寺が開かれて1100年も経って急にこの土地が人の住む土地に造り替えられるようになったのは、機械や技術が進み大がかりな工事がしやすくなったこと、交通が便利になってきたことなど、さまざまな条件が整えられてきたからです。開発とひとことでいってもブルドーザーを入れ、人が住めるようになるまでに10年はかかると言われています。この新多聞団地もおよそ10年の年月をかけて完成しました。この新多聞団地では住宅ができあがる前から計画的に学校が建てられ、昭和49年に多聞南小学校ができあがったのです。

参考（『多聞南小学校のできあがるまで』 昭和58年11月の小冊子）

（『多聞のあゆみ』 平成29年12月刊 多聞史誌編集委員会）

（多聞南小ホームページ H26年度3年生作成ページ）